新南陽市埋蔵文化財調査報告　第１集

# 勝　栄　寺

１　９　８　３

新　南　陽　市　教　育　委　員　会

新南陽市埋蔵文化財調査報告　第１集

# 勝　栄　寺

１　９　８　３

新 南 陽 市 教 育 委 員 会

# 序

新南陽市富田清水にある勝栄寺は，陶弘政の開基によるもので，寺敷地内の北と西に残る土塁は創建当時の遺構ではないかと考えられ，中世の富田市や富田港の歴史にも関係する貴重な史跡であります。三坂圭治・小野忠熙両氏の史料的考察並びに予察調査により低地に築造された中世豪族屋敷跡と推定されていました。

近年，都市開発事業により市街地の開発が進められ，本寺においても富田中央土地区画整理事業により，敷地内の一部と周辺が開発されることになりました。

新南陽市教育委員会では，昭和56年度に外濠跡の一部，昭和58年度に寺境内西部の一部の発掘調査を実施しました。

本書はこれらの実施した調査報告書であります。この報告書が地域の人々の文化財に対する理解を深め，地方史研究の一助になれば幸せであります。

調査を進めるに当って終始調査に携っていただいた山口県埋蔵文化センターの諸先生方並び勝栄寺，地元の方々のご協力に対し深甚の謝意を表すものであります。

昭和59年３月

新南陽市教育委員会

教育長　武　居　哲　夫

# 例　　言

1．本書は，山口県新南陽市富田清水に所在する勝栄寺遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は，新南陽市教育委員会が昭和58年度事業として昭和58年８月26日～９月７日，12月21・23日にかけて実施した。

3．調査にあたっては，勝栄寺をはじめ地元関係各位から多大の協力・援助を得た。

4．調査は，山口県埋蔵文化財センター中村徹也・前田耕次・乗安和二三・渡辺一雄・西岡義貴が担当した。

5．本書に掲載した地図は，国土地理院発行の50,000分の１地形図「徳山」,「防府」を複製したものである。

6．本書に使用した方位は磁北で標示し，レベルは海抜標高である。

7．出土遺物の整理については，山口県埋蔵文化財センター浅川由起子・後藤和美・西坂ひかり・石井晶子・佐々木由美・岡田洋子の協力を得た。

8．本書には，昭和56年度に実施した濠の遺構確認調査（調査担当：山口県埋蔵文化財センター中村徹也・大坪憲一）の概要について併せて収録した。

9．本書の執筆・編集は，中村の助言・指導を得て乗安が担当した。

# 勝　栄　寺

## 目　次


Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の経緯 …… 2

1．第１次調査 …… 2

2．第２次調査 …… 2

Ⅲ　調査の概要 …… 7

1．調査区の設定 …… 7

2．層序 …… 7

Ⅳ　遺　構 …… 8

1．上層の遺構 …… 8

2．下層の遺構 …… 8

(1)　石室墓 …… 8

(2)　集石遺構 …… 10

(3)　土坑 …… 10

(4)　溝状遺構 …… 11

3．土塁 …… 11

Ⅴ　遺　物 …… 11

1．土器 …… 12

2．土製品・鉄製品 …… 13

3．石製品 …… 13

Ⅵ　まとめ …… 14

# 図　版　目　次

図版第１　上：発掘前調査地近景（西から），下：同上（東から）

図版第２　上：調査区全景（南から），下：同上（北から）

図版第３　上：調査区中央部近景（東から），下：同上（西から）

図版第４　上：調査区中央部近景（北から），下：南側東西トレンチ全景（東から）

図版第５　左：ＳＴ01（東から），右：ＳＴ01（西から）

図版第６　上：ＳＴ01完掘状況（北から），下：同上（南から）

図版第７　上：ＳＴ02・ＳＸ01・ＳＸ02・ＳＸ03・ＳＤ02（南から），下：同上（東から）

図版第８　左：ＳＴ02（南から），右：同上（西から）

図版第９　上：ＳＸ01土師器出土状況，下：Ａ－01区集石

図版第10　上：ＳＫ02，下左：ＳＫ04，下右：ＳＫ03

図版第11　土器・土製品

図版第12　石製品

# 挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 1

第２図　濠土層断面図(北トレンチ東壁) …… 2

第３図　調査区位置図 ……３～４(折込)

第４図　遺構配置図 ……５～６(折込)

第５図　調査区土層図(東壁) …… 7

第６図　ＳＴ01実測図 …… 8

第７図　ＳＴ02・ＳＸ01・ＳＸ02・ＳＸ03・ＳＤ02実測図…… 9

第８図　ＳＫ02・ＳＫ03・ＳＫ04実測図…… 11

第９図　土器実測図 …… 12

第10図　土製品・鉄製品実測図 …… 13

第11図　石製品実測図 …… 14

上：発掘前調査地近景（西から）
下：　　同　　上　　（東から）

図版第２

上：調査区全景(南から)
下：　同　上　(北から)

上：調査区中央部近景
（東から）

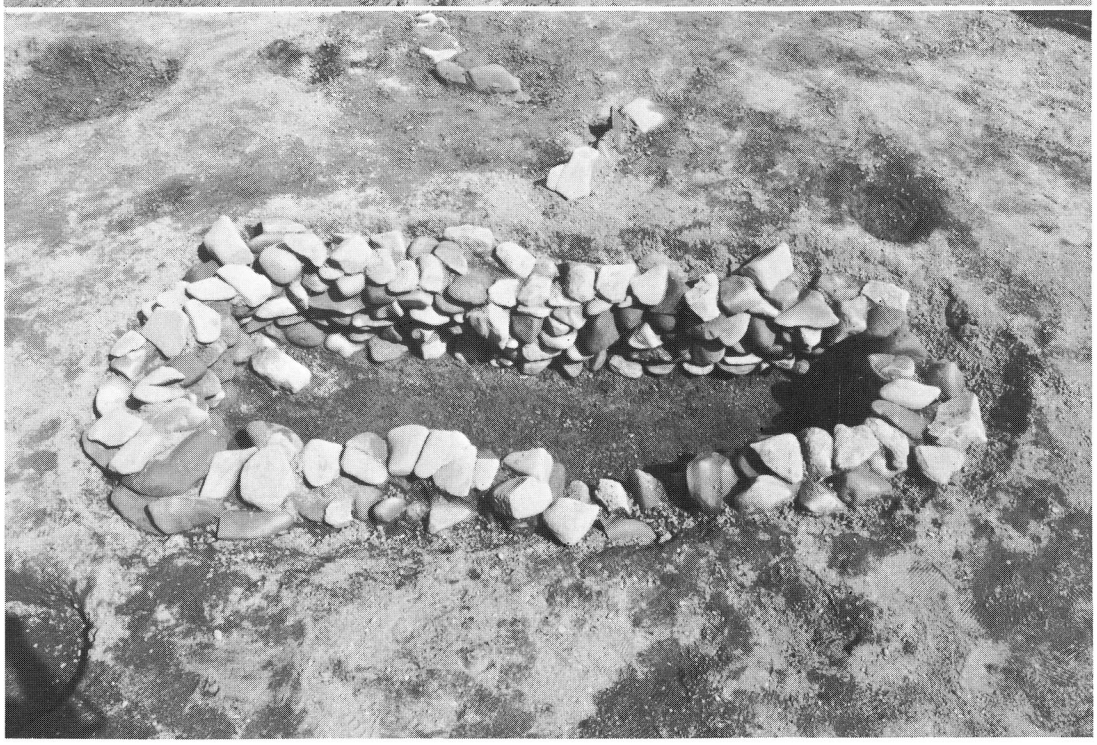
下：同　上　（西から）

図版第４

上：調査区中央部近景（北から）
下：南側東西トレンチ全景（東から）

左：ST01（東から），右：ST01（西から）

図版第6



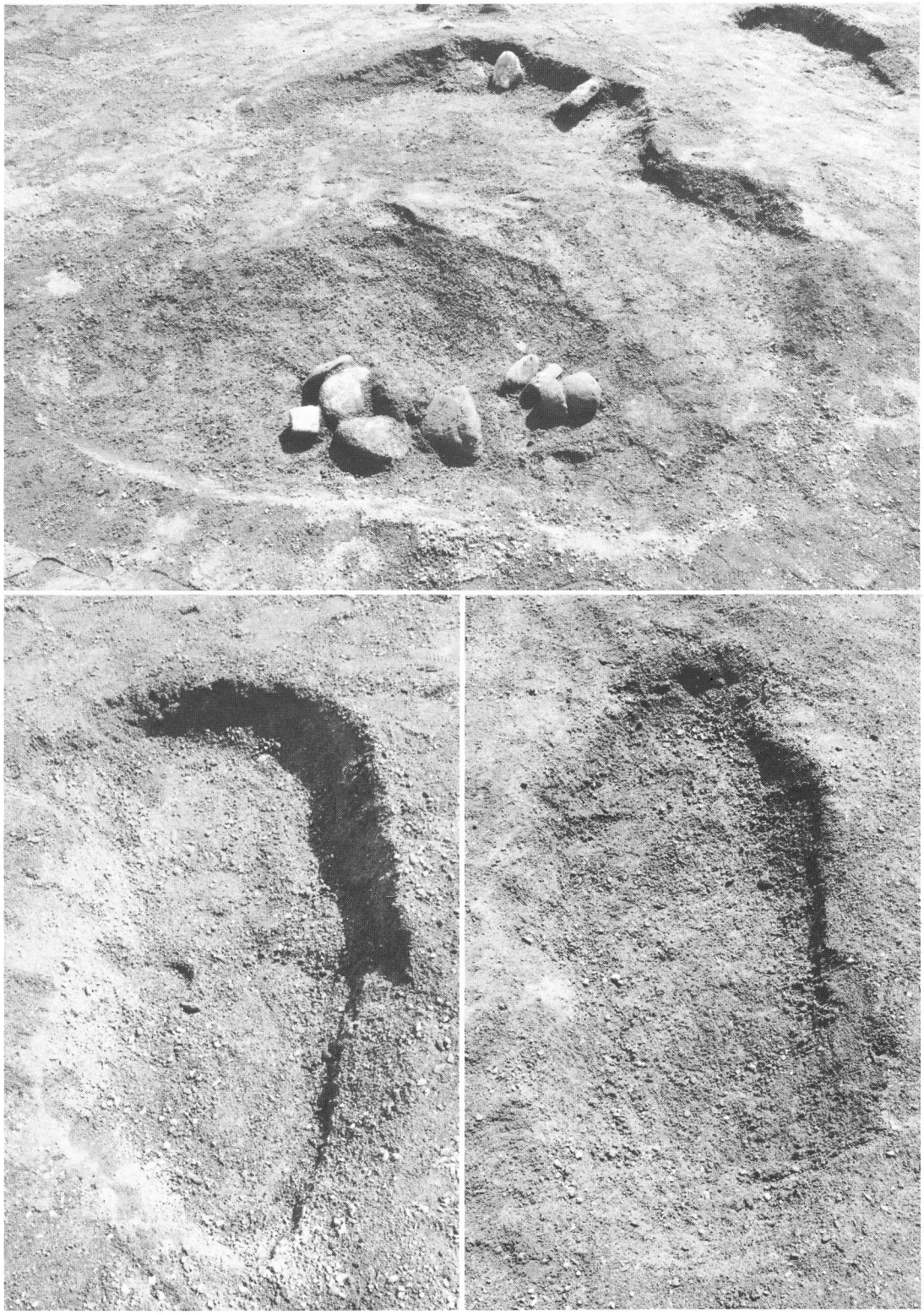
上：ST01 完掘状態（北から）
下：　同　　上　　（南から）

上：ST02・SX01・SX02・SX03・SD02（南から）
下：　同　上　（東から）

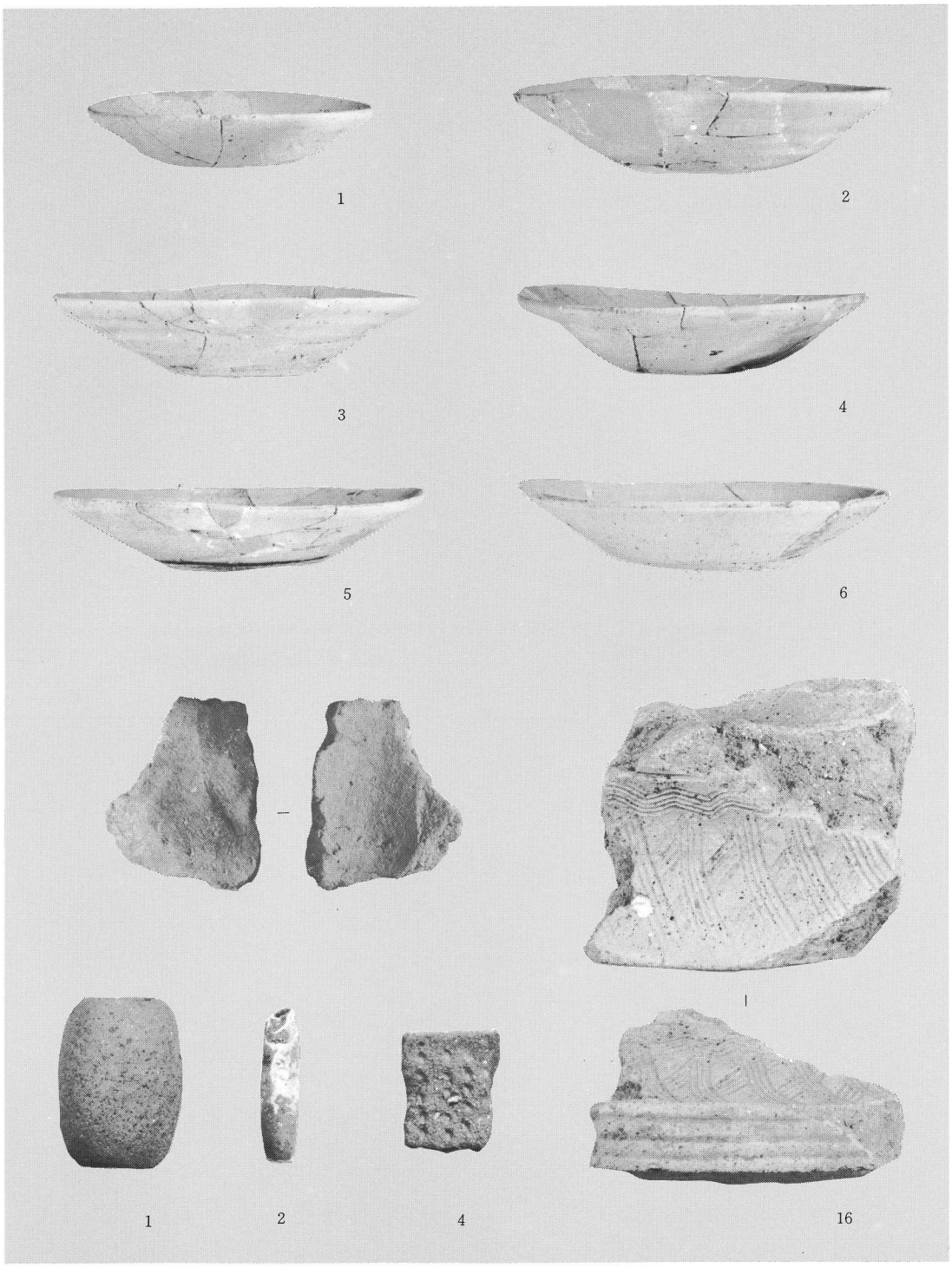
左：ＳＴ02(南から)
右：同　上(西から)

上：ＳＸ01土師器出土状況
下：Ａ－01区集石

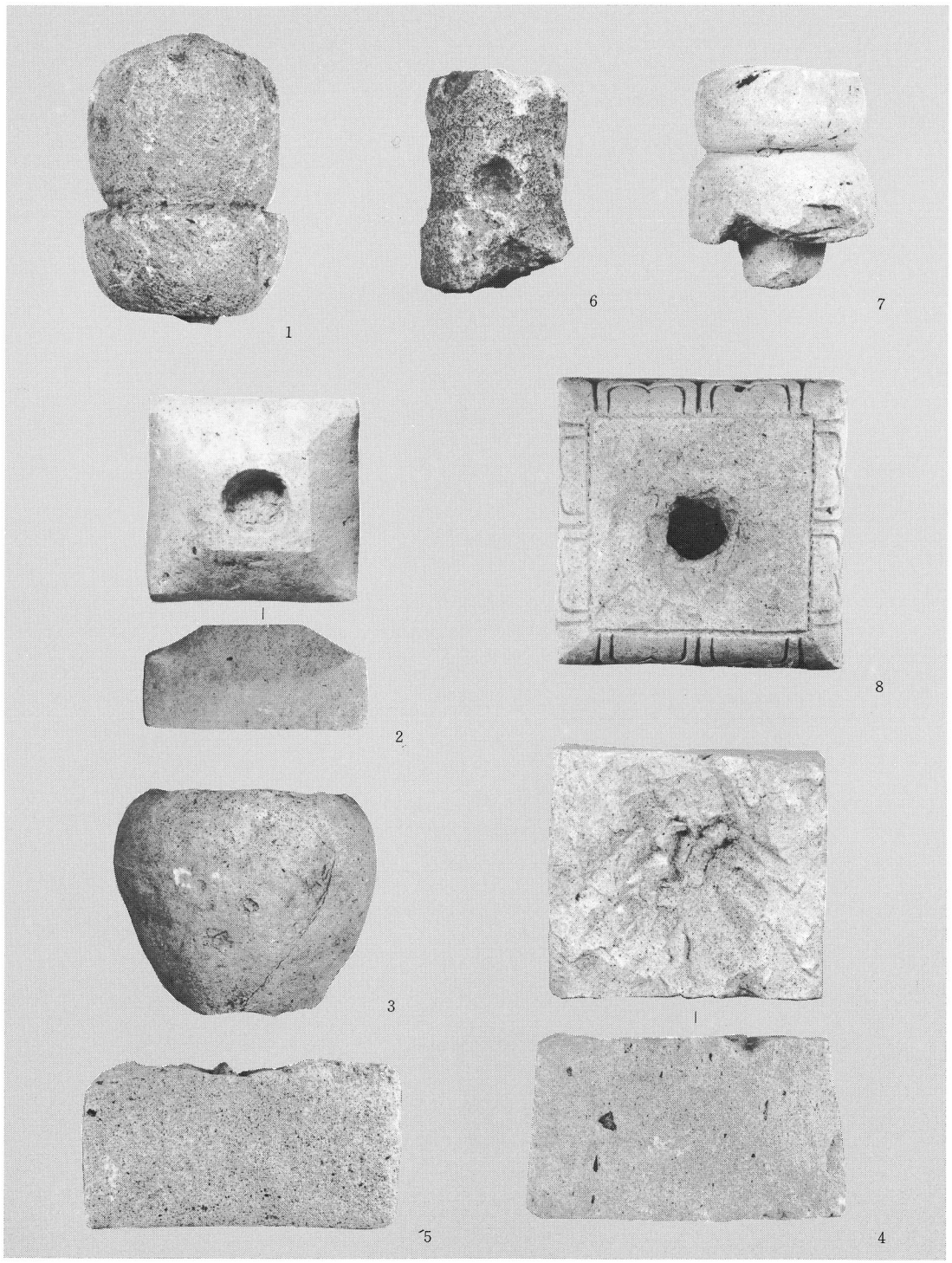
図版第10



上：SK02，下左：SK04，下右：SK03




土器・土製品　（1：2）

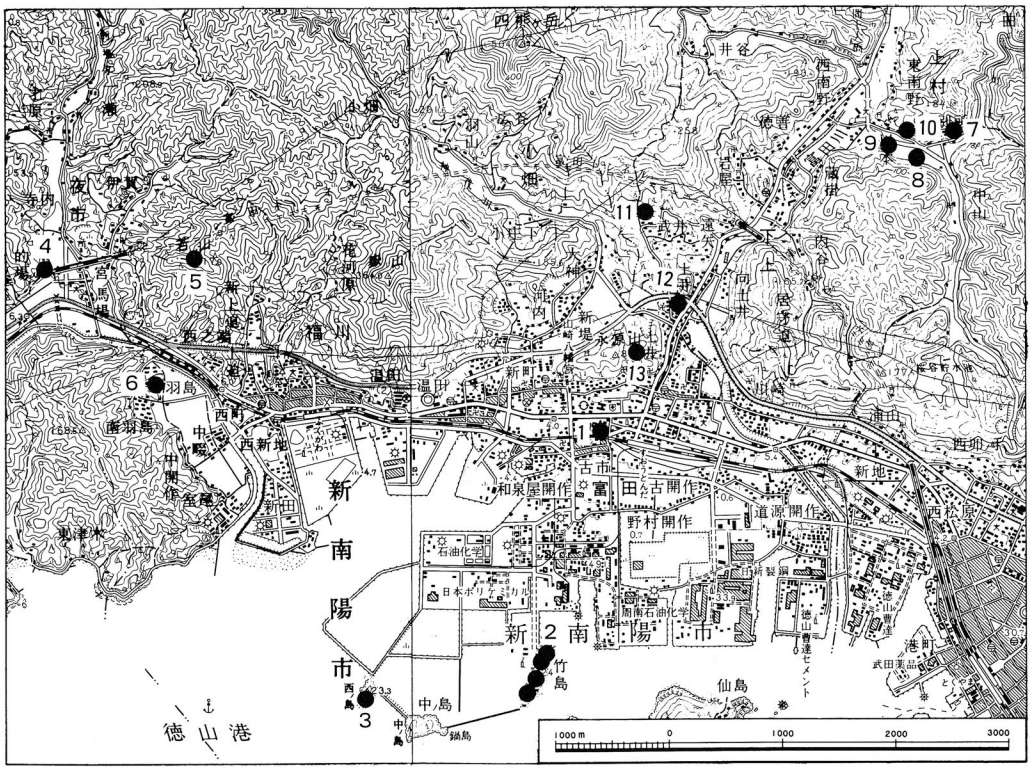



石　製　品　　（1：5）

# Ⅰ　遺跡の位置と環境

勝栄寺は，新南陽市富田字清水に所在する浄土宗の寺院であり，周囲に土塁や濠をとどめていたことなどから，旧来中世豪族の屋敷構えを備えた遺跡として周知されてきた。当地一帯は，富田川によって形成された沖積平野が展開し，背後に山麓をひかえ南に瀬戸内海を臨む。当寺はこの河口近くにできた三角洲の上に立地しており，南には近世以降の干拓地が広がっている。

沖積平野縁辺の山麓，丘陵一帯には，弥生時代から古墳時代の遺跡が散在し，ことに沖合に浮かぶ竹島の御家老屋敷古墳は，三角縁神獣鏡を含む舶載鏡４面・銅鏃26本・素環頭太刀・鉄剣・鉄斧など質量ともに豊富な副葬品を出土した県内最古の前方後円墳として著名である。これらの遺跡の存在は，この富田一帯が古くから周防の拠点的地域の一つとして，重要な位置を占めてきたことを示している。古代には「和名抄」の富田郷・平野郷に含まれ，平野には山陽道の駅家が置かれた。中世には国衙領富田保・平野保があり東大寺造営料に寄進されたが，大内氏の一族陶氏が地頭職に補任され，一帯を支配していた。古代・中世を通じて当地は富田湊を中心に交通の要衝として発展をとげる(第１図)。




**第１図**　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

**1 勝栄寺**　2 竹島古墳群(前方後円墳・円墳)　3 西ノ島遺跡(土師器包含地)　4 的場宮の馬場遺跡(土師器包含地)
5 若山城跡(室町時代)　6 羽島古墳(円墳)　7 源氏原古墳(円墳)　8 曽根古墳(円墳)
9 川本古墳(円墳)　10 天王山遺跡(弥生時代石棺・後期土器包含地)　11 武井遺跡(弥生時代石棺)　12 武井比丘尼迫古墳(円墳)
13 永源山墳墓群(横穴墓他)

# II　調査の経緯

## 1．第1次調査

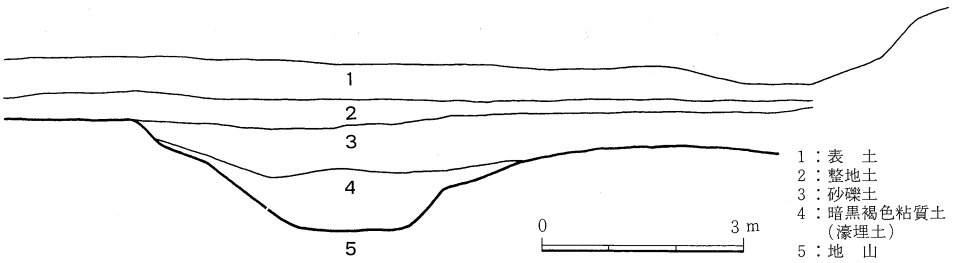
勝栄寺は，山号を出城(すいき)山と称し，開山は其阿清照上人,開基は陶越前守弘政と伝えられ，もと時宗の道場であった。其阿上人は康暦元年（1379）に入寂しており，また永徳元年（1381）の陶弘政による田地寄進状があることから，創建は14世紀後半と推定される。特筆すべきは寺院境内が土塁と濠によって囲郭されていたことであり，これが創建時に伴うものかどうかは定かでないが，江戸時代の『防長寺社由来』絵図には，土塁と濠がすでに描かれていた。土塁は今日まで残存し，濠も近年までその面影をとどめていた。これらは中世豪族屋敷の構えを踏襲する遺構として古くから注目され，県内でも数少ない貴重な館跡として周知されてきたものである。

昭和45年，市の都市計画決定がなされ，この一帯に区画整理事業が予定された。そこでこの事業の実施に先立ち，濠の実態を明らかにするため，昭和56年11月，第1次の発掘調査が行なわれることとなった。調査は，境内の北西，土塁の外側部分について，長さ15.5m，幅3mのトレンチ2本を設定して実施された(第3図)。

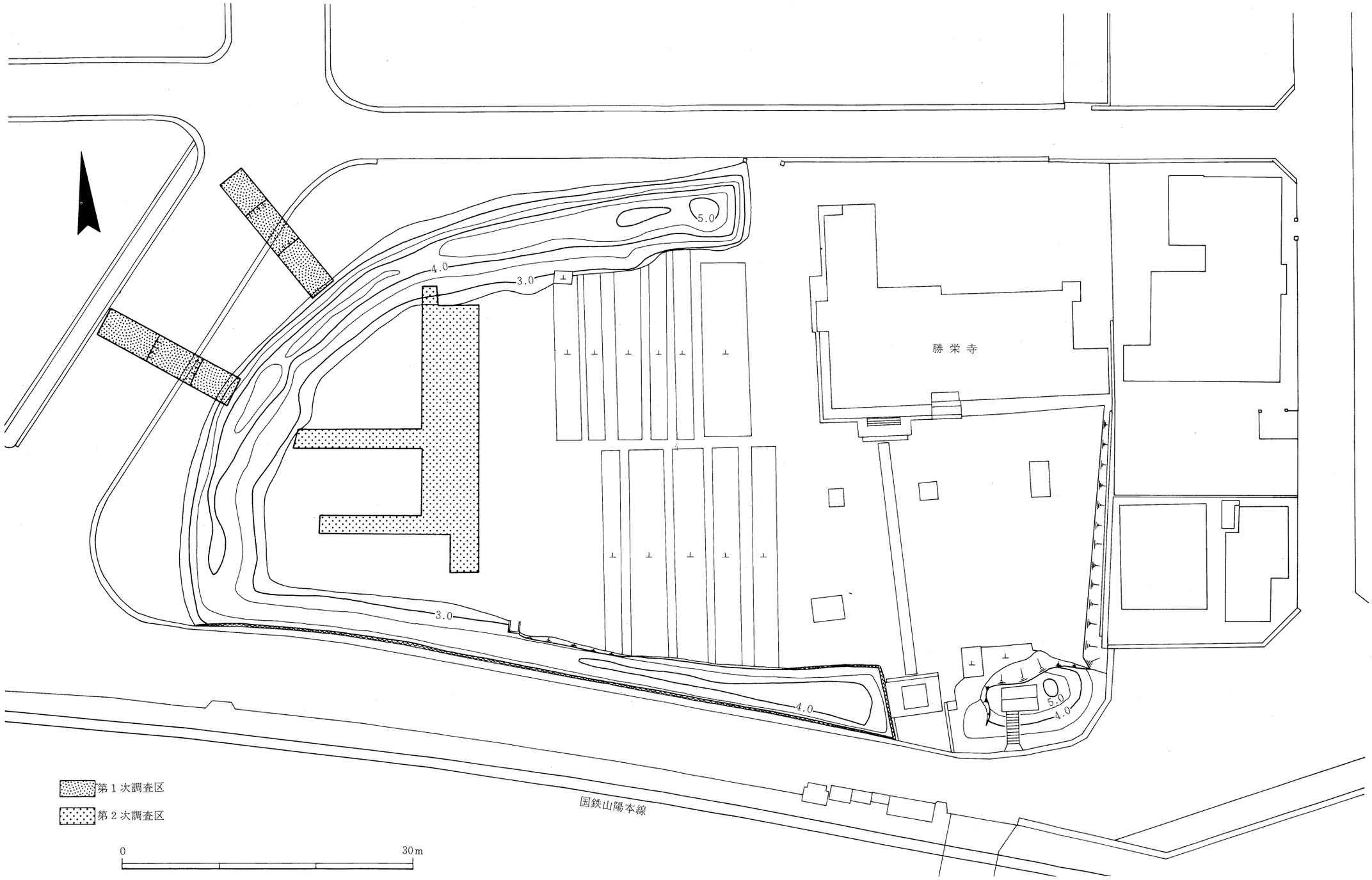
この結果，濠は幅約5.8m，深さ約1.6mで，土塁の輪郭に沿って巡ることが判明した。濠と土塁の間には，濠の外肩より一段低い幅約4.2mの平坦部が裾を走り，この面から濠の底面までは深さ90cmをはかる(第2図)。この平坦面は，『防長寺社由来』絵図において，境内西半分の三方にみられる土塁と濠の間の帯状部分に相当するものかと推定される。なお，濠内からは数は少ないが瓦質土器片および下駄が出土している。

## 2．第2次調査

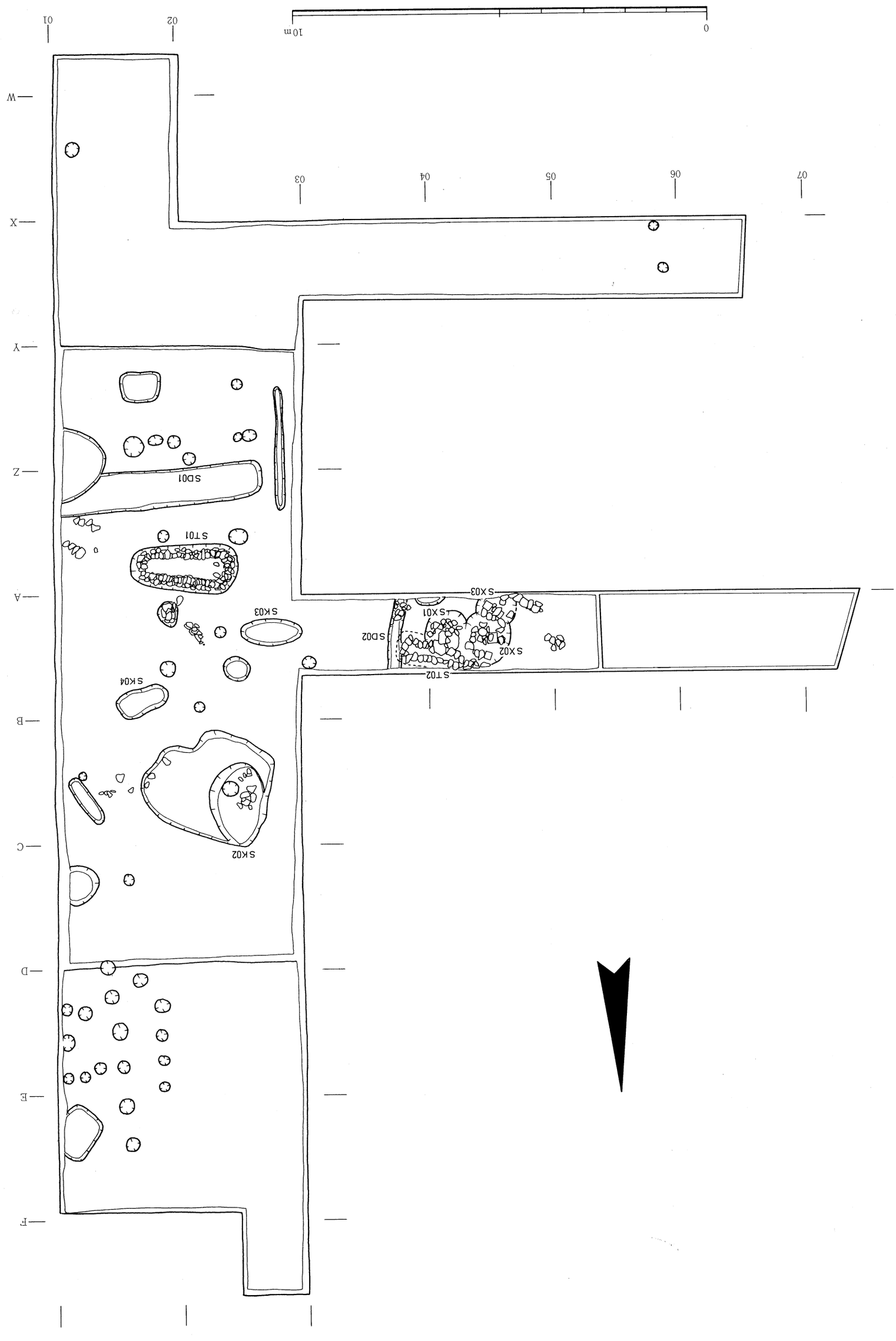
その後，境内西側の空間地について，土塁を残して内側に都市公園を整備する計画が策定された。これに伴い関係機関による協議がなされ，表土を除去しての盛土工法ではあるが，境内の状況はこれまでまったく解明されていないことから，今回事前に遺構の有無およびその内容等を確認するため第2次の発掘調査を実施することとなった。調査は，新南陽市教育委員会が主体となり，昭和58年8月26日から9月7日まで行った。調査面積は約206㎡である。なお，今回土塁の地形測量も併せておこなうことになり，同年12月21・23日の両日をこれにあてた。




**第2図**　濠土層断面図（北トレンチ東壁）




**第３図**　調査区位置図


SD01
ST01
SK03
SK04
SK02
SX03
SX01
SD02
SX02
ST02
W
X
Y
Z
A
B
C
D
E
F
01
02
03
04
05
06
07
0
10m

第4図　遺構配置図

# Ⅲ　調査の概要

## 1．調査区の設定

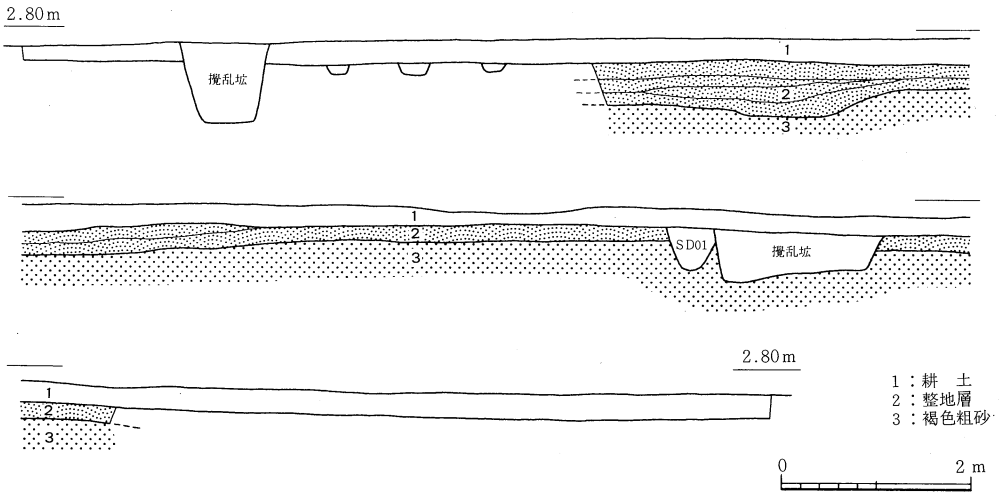
勝栄寺境内は，北面西半分と西面・南面を土塁で囲まれている。東半分には本堂，中央に墓地が営まれ，西端部には空地を残し今は畑として利用している。土塁のうち南面する部分は，国鉄山陽本線敷設時に破壊され，元の位置より，北へ寄せて復元されたものである。北面・西面の部分が旧来の土塁をそのまま遺すものとされてきた。今回の調査は，境内西端部の畑地を対象としたものである。

調査にあたっては，対象地全体に３×３ｍのグリッドを設定した。まず01ラインに沿って幅３ｍの南北方向のトレンチを入れて層序を確認し，遺構の検出に伴いこれを西へ３ｍ拡張。さらに遺構の広がりを確認するためＡライン・Ｘラインに沿って幅２ｍの東西方向のトレンチを順次設定した(第４図)。

## 2．層　　序（第５図）

調査地の基本的な層序は，第１層表土（耕土），第２層黄灰褐色砂質土，第３層褐色粗砂からなる。第２層は整地層で，小礫や黄橙色・青灰色粘質土塊を混じる。弥生土器・土師器（擂鉢）・瓦質土器（鍋）・陶器（擂鉢）・青磁・瓦などが包含されている。地表面から第３層まで深さ約40㎝，この上面は中央部で高く南と北側へやや傾斜している。第３層は少なくとも70㎝以上の厚さをもち，それ以下では若干の地下水の滲出がみられる。おそらくこの第３層が勝栄寺創建寺の基盤層と推定できる。第３層からは若干の弥生土器片などが出土しており，旧河口付近の三角洲の形成時期をうかがう１つの手がかりとなる。

遺構は，現代の攪乱坑を除いて，第２層および第３層上面に検出された。以下，第２層のものを上層，第３層のものを下層の遺構としてとり扱うことにする。




**第５図**　調査区土層図（東壁）

# Ⅳ 遺　　構

## 1．上層の遺構

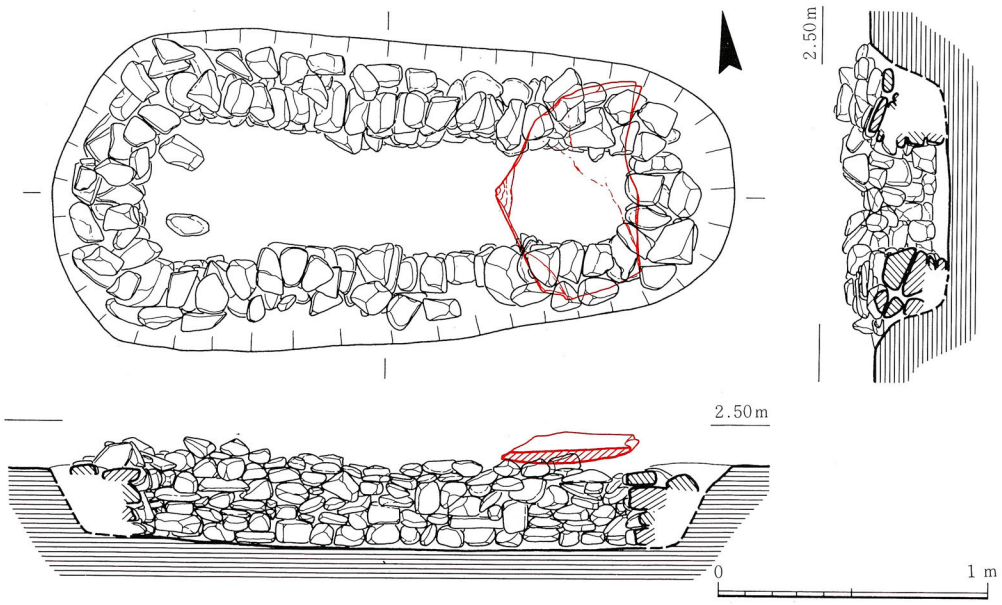
上層の遺構として，柱穴とみられる小ピット・土坑・溝状遺構がある。小ピットは，D・E-01区に集中して認められたが，ほかにはW～C-01・02区およびX-05区に散見されたにとどまる。いずれも建物としてのまとまりを示すものはみられない。このほか，B-01区では径1.5×1.3m・深さ約30cmの不整円形の土坑SK01が検出され，Z-01・02区で東西方向に走る幅1m，深さ45cmの溝状遺構SD01が認められた。小ピットから染付・土師器片などが出土していることから，これらの上層遺構は，いずれも近世ないしそれ以降に属するものと推定される。

## 2．下層の遺構

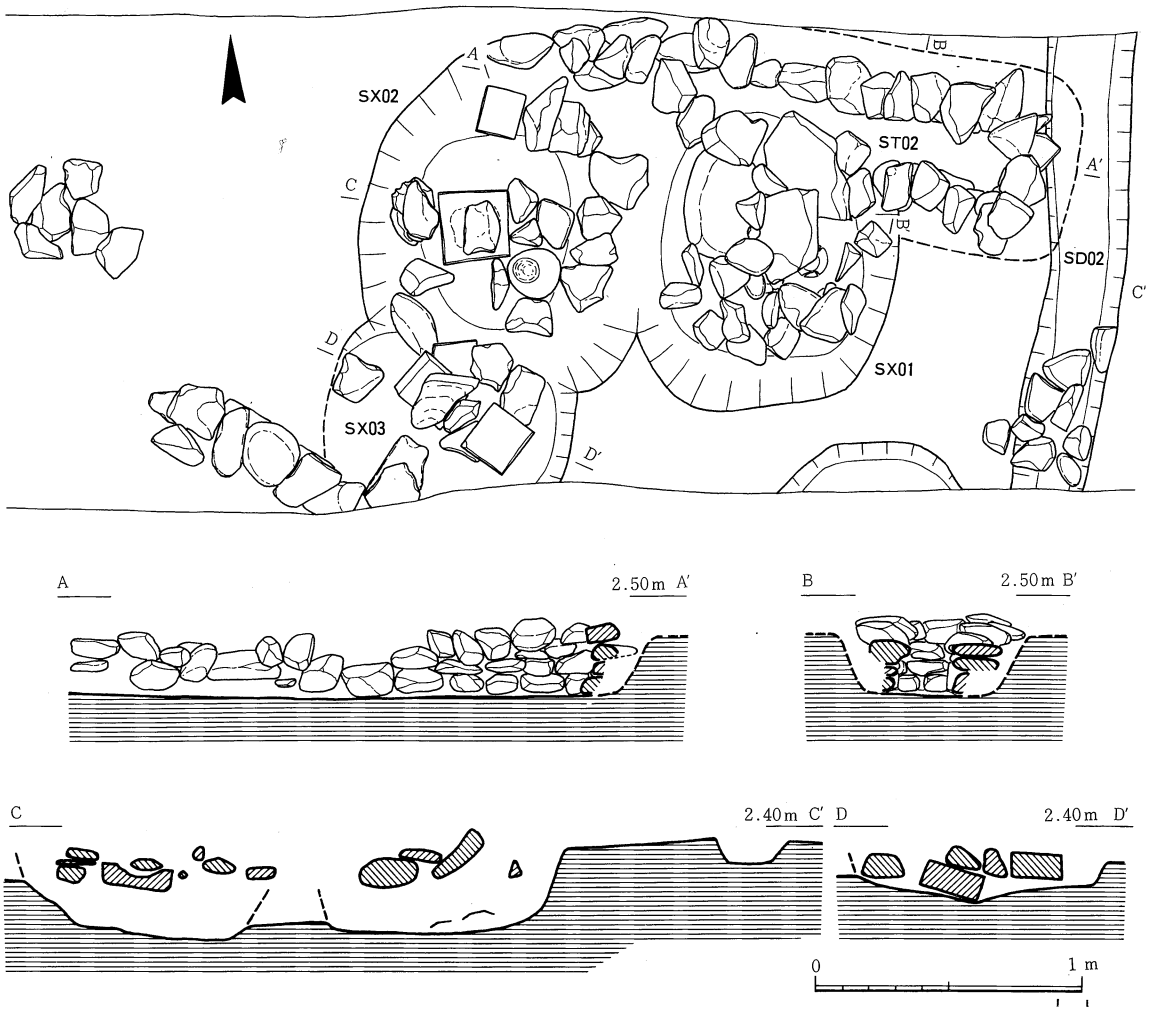
下層の遺構は，調査地中央のやや微高地状を呈する部分を第3層まで掘り下げて検出されたもので，Y～C-01・02区，A-03～05区に分布する。これらには，石室墓・集石遺構・土坑・溝状遺構などがある。

### (1) 石 室 墓

**ST01**（第6図） 長さ2.54m，中央部幅1.14mの隅丸長方形に近いプランの掘り方をもち，深さ32cm。掘り方内には，径20×10cm前後の円礫を用いて5～6段積み重ね，箱形の石室を構築している。北壁・南壁の下半では礫の長辺を利用して横積みし，上半および東・西壁では小口積みとしている。壁面はほぼ垂直に近く，東壁のみやや上方が内側にせり出している。壁体と掘り方との間には，若干の裏込めがなされている。石室内法は，長さ1.85m，西端部幅50cm，中央部幅42cm，東端部幅35cmで，西から東へ狭まっている。石室上面の東端には，蓋石1枚が




**第6図**　ST01実測図




**第7図**　ST02・SX01・SX02・SX03・SD02実測図

残存し，石室内西端底部には枕石と推定される小礫2個が認められた。人骨はまったく遺存していなかったが，枕石の位置および石室の規模からみて，頭位を西へ向けた仰臥伸展葬と推定されよう。

石室内には，褐色粗砂が流入埋積しており，須恵器・土師器（糸切り底）小片などが包含されていた。また，裏込めの埋土上半中からも土師器小片が，北壁礫間から土錘が検出された。遺構の時期を決定する資料としては不十分であるが，類似の遺構であるST02が室町時代後半の遺構に切られていることから，少なくともこれ以前に属するものである。

**ST02**（第7図）　SD02およびSX01・SX02によって切られているため掘り方の規模は明瞭でないが，深さは約30cm，ST01と同様の石室をもつ。石室壁体も西壁から南壁にかけて大きく壊されているが，残存する石室内法は，長さ1.6m，幅21cmをはかる。ST01よりひとまわり大きい円礫を3～4段積み重ねて壁体とし，裏込めはほとんどなされていない。石室東端の幅が狭いことからみて，石室プランはST01同様西が広く東へ狭まる形状であったと推定され

る。出土遺物は認められないが，ＳＸ01・02・ＳＤ02との切り合い関係から，室町時代後半以前に位置づけられる。

なお，Ｚ-01区とＡ-04区で，東西方向の列石を検出した。あるいは，ＳＴ01・02のような石室墓に類似したものかとも推定されるが，掘り方が明瞭でないことなどから，性格は不明である。

(2) 集石遺構（第７図）

**ＳＸ01** 径約1.15×1.0ｍ，深さ約35cmの長円形の掘り方をもち，内部に径10～40cmの大小の円礫がまとまって検出された。この礫群は掘り方の上半部に集中し，下半には認められず，底面には６個体分の土師器皿がまとまって出土した。この遺構はＳＴ02を切っており，またＳＸ02とも切り合っているが，先後関係は埋土からは明瞭ではなかった。礫の分布状況からみれば，ＳＸ02によって切られた可能性もある。出土遺物からみて，室町時代後半に属するものである。

**ＳＸ02** 径約1.4×1.1ｍ，深さ約35cmの長円形の掘り方をもつ。掘り方上半に，径10～30cmの円礫，五輪塔の火・水輪，宝篋印塔の反花座などが集中して認められた。石塔類はいずれも原位置を保ってはいない。掘り方下半部には何も検出されなかった。礫間や埋土中から，土師器（皿・鍋）片や鉄釘が出土した。この遺構はＳＸ03と切り合っており，ＳＸ03が新しいと推定される。室町時代後半の遺構とみられる。

**ＳＸ03** 南端が調査区外へ延びているが，径約0.9ｍ前後の円形に近い掘り方とみられ，深さ約20cm。掘り方内には，径20cm前後の円礫が集積され，五輪塔の地輪２個が検出された。このうち西側の１個は，掘り方底面に据っており，やや傾いてはいるが原位置に近い状態と推定される。室町時代後半のものであろう。

これらの集石遺構の性格については明瞭ではないものの，ＳＸ01では完形品を含む６個体の土師器皿が出土し，供献遺物とみても不合理ではないこと，さらにＳＸ02・ＳＸ03では石塔類が存在することから，一応火葬墓としての可能性を指摘しておきたい。

なお，ＳＸ02の西側やＳＴ01の北側にも，径30～50cmの小規模な範囲の集石が認められた。いずれも明瞭な掘り方をもたず，また集石の範囲も小さい。これがＳＸ01～03と同一の性格のものかどうかについては明らかでない。

(3) 土　　坑（第８図）

**ＳＫ02** 径約3.1×2.5ｍの不整形を呈し，深さ10cm。西北隅には，さらに径2×1.4ｍの楕円形で，深さ10cmほどの落ち込みがみられる。この落ち込み部には，径10cm前後の円礫の集積が認められ，五輪塔の空風輪が含まれていた。土坑内からは，土師器皿・瓦質土器鍋・擂鉢・白磁皿・弥生土器壺・土錘など時代の異なる遺物が混在して出土した。最も新しい時期の遺物からみて，室町時代後半の遺構と考えられる。

**ＳＫ03** 長径1.44ｍ，短径0.66ｍの楕円形を呈し，深さ13cmをはかる。土師器・須恵器・六連（むつれ）式製塩土器・陶器片などが出土した。

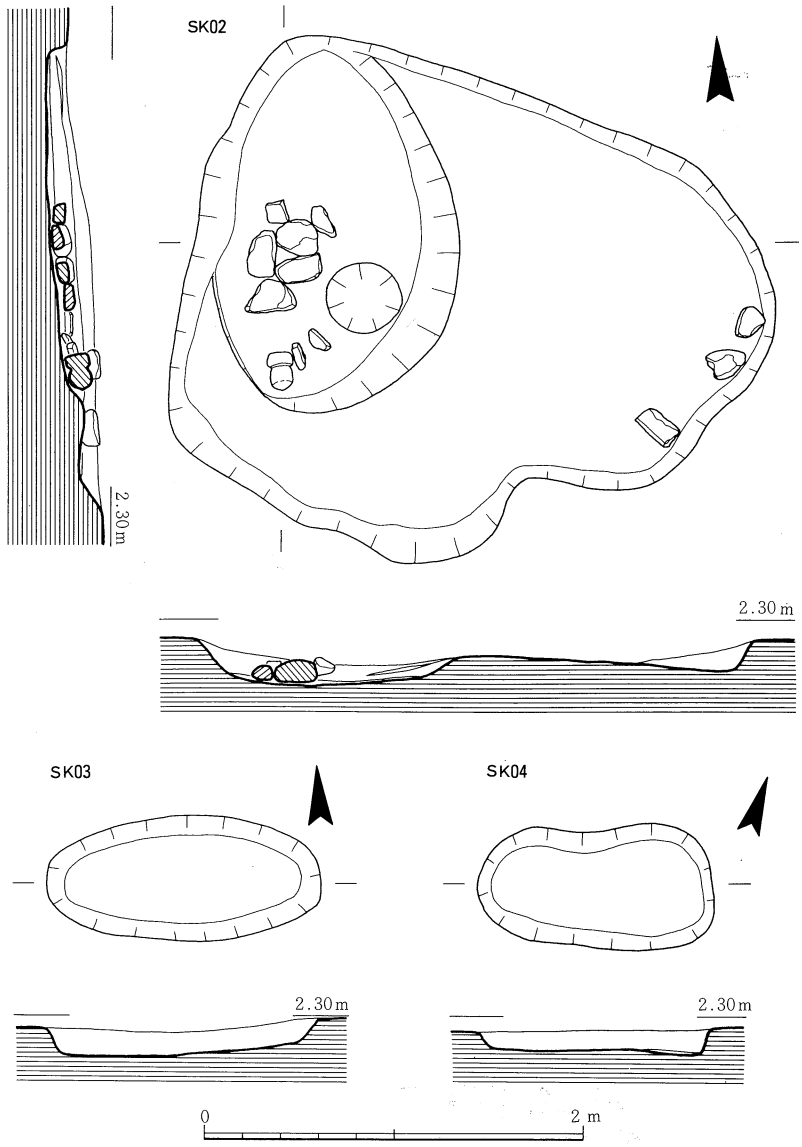
**ＳＫ04** 長径1.23ｍ，短径0.64ｍの不整な楕円形を呈し，深さ15cm。土師器(皿)・須恵器片

が検出された。室町時代後半に属するものとみられる。

(4) 溝状遺構(第7図)

**SD02** 幅60cm，深さ20cmの南北に走るもので，ST02を切っている。埋土から瓦質土器片が出土，室町時代のものとみられる。

以上の遺構のほかに，Y～A-01・02区で柱穴状の小ピットが検出されたが，まとまりを示すものは認められなかった。




**第8図** SK02・SK03・SK04実測図

## 3．土　墨

境内の西側に残る北面・西面の土塁は，後世の崩落や改変によって内側裾部や上面に乱れが認められるが，地形測量の結果，現状での裾部の幅約7～9m，上面幅約1～2m，高さ約2.5～1.5mとなる。なお山門の東側には，庄江森大明神石祠の鎮座する高まりがみられる。この石祠は江戸時代の『防長地下上申』に記載されており，この高まりが南面する古い土塁の一部であったとすれば，土塁で囲郭された南北幅は土塁の芯々距離で約56mをはかる。東西幅については，東西土塁がすでに壊されているため不明である。

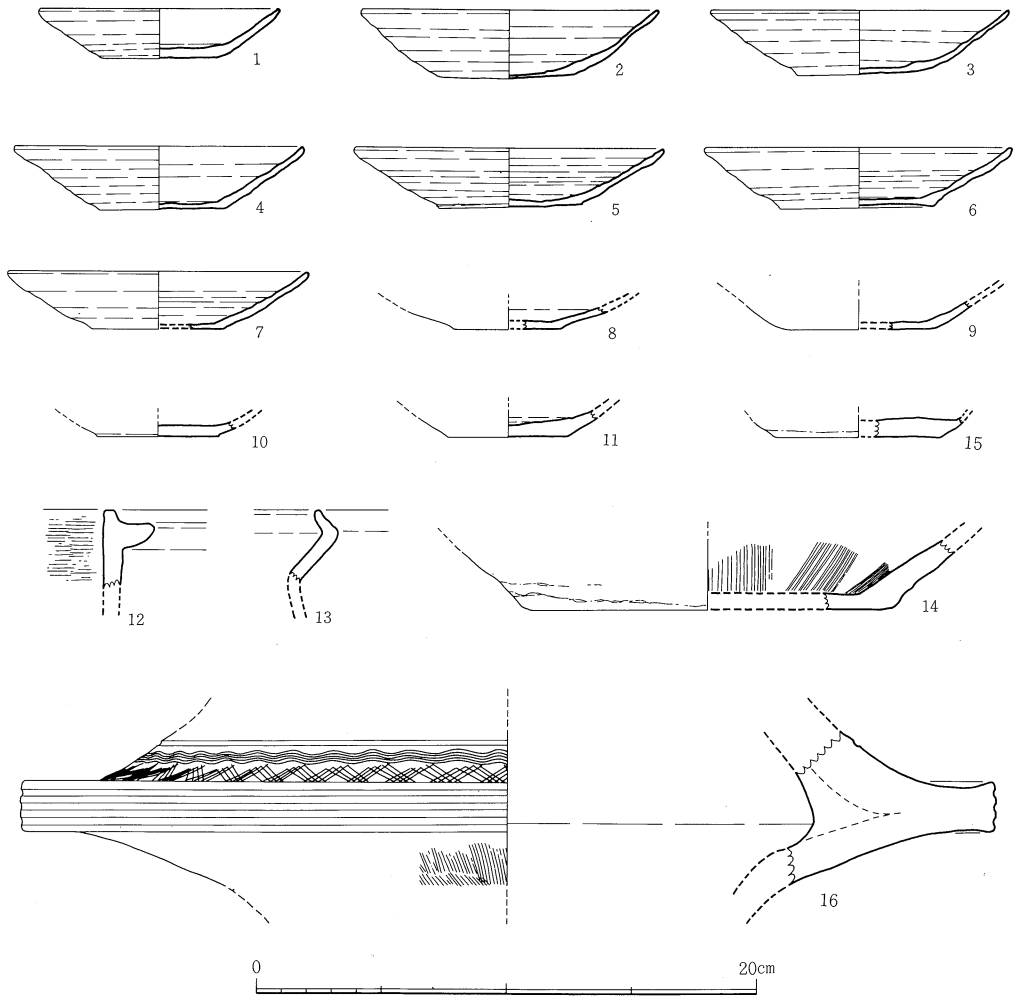
# V 遺　　物

今回出土した遺物には，弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器などの土器のほか，土錘・鉄釘・石塔類などがあり，弥生時代から近世以降のものまで広範な時代にわたるものである。土器はほとんどが小片であり，室町時代に属するものが大半を占める。ここでは，遺構出土の遺物を中心としてとりあげておきたい。

## 1．土　　器（第９図）

**ＳＸ01**（１～６）　遺構の下面からまとまって出土したもので，いずれも土師器の皿。口径9.5cm，器高２cmの小型のもの（１）と，口径11.4～12.2cm，器高2.4～2.7cmのひとまわり大きいもの（２～６）がみられる。いずれも器壁が非常に薄く，体部は回転ナデ調整，底部は糸切り。焼成良好。室町時代後半に位置づけられるものである。

**ＳＸ02**（７・８・12）　７・８は土師器皿でＳＸ01の２～６と同タイプ。７は復元口径11.9cm，器高2.3cm，底部は糸切り。12は土師器鍋で，口縁下に鍔状突帯をもつ。外面ヨコナデ，内面ヨ




**第９図**　土 器 実 測 図

コハケ目調整。胎土に砂粒多く含み，焼成やや軟質。室町時代に属する。

**SK02**（9・10・13～16）　9・10は，SX01の2～6と同タイプの土師器皿。底部に板目を残す。14は瓦質土器の擂鉢で，内面に9条単位のカキ目が認められる。外面灰黒色，器肉は灰色を呈し，焼成良好。13は瓦質土器の鍋。「く」の字状に外反する口縁の端部が内側上方に立ち上がる。外面銀灰色，器肉灰白色を呈し，焼成良好。いずれも室町時代に属するものである。15は白磁皿。淡緑灰白の釉が外底部近くまでかかり，器肉は灰白色。平安末～鎌倉時代のものとみられる。16は弥生土器の壺。複合口縁の屈曲部外縁に3条の擬凹線，内傾して立ち上がる口縁上半外面に5条単位の櫛描波状文，4条単位の櫛描鋸歯文をめぐらす。弥生時代後期のものである。なお，15・16は混入遺物とみられる。

**ST01**（11）　土師器の皿ないし杯の底部。全体に磨耗が著しいが，底部は糸切りであろう。器壁はやや厚手で，胎土に金雲母を含む。焼成やや軟質。室町時代に属する可能性もあるが，SX02より先行するものとみられる。

## 2．土製品・鉄製品（第10図）

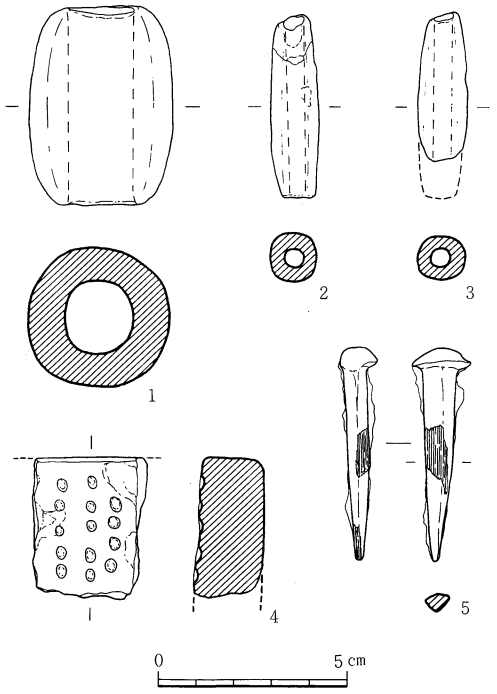
1～3は土錘。円孔を有する管状のもので，太型（1）と細型（2・3）のものがある。1は，長さ5.2cm，胴部幅3.8cm，孔径1.8cmで，重さ58.4g。ST01出土。2は，長さ4.8cm，胴部幅1.3cm，孔径0.5cm，重さ6.9g。3は，現存長3.9cm，胴部幅1.3cm，孔径0.5cm，重さ4.5gをはかる。2・3はSK02出土。

4は片面に刺突文を施した厚さ1.8cmの板状土製品。3方を欠失し，背面は無文。橙褐色を呈し，胎土に長石，石英粒を多く含む。焼成良好。性格不明であるが，胎土焼成は弥生土器に近く，あるいは分銅形土製品の退化型式かとも推測される。V-01区第3層出土。

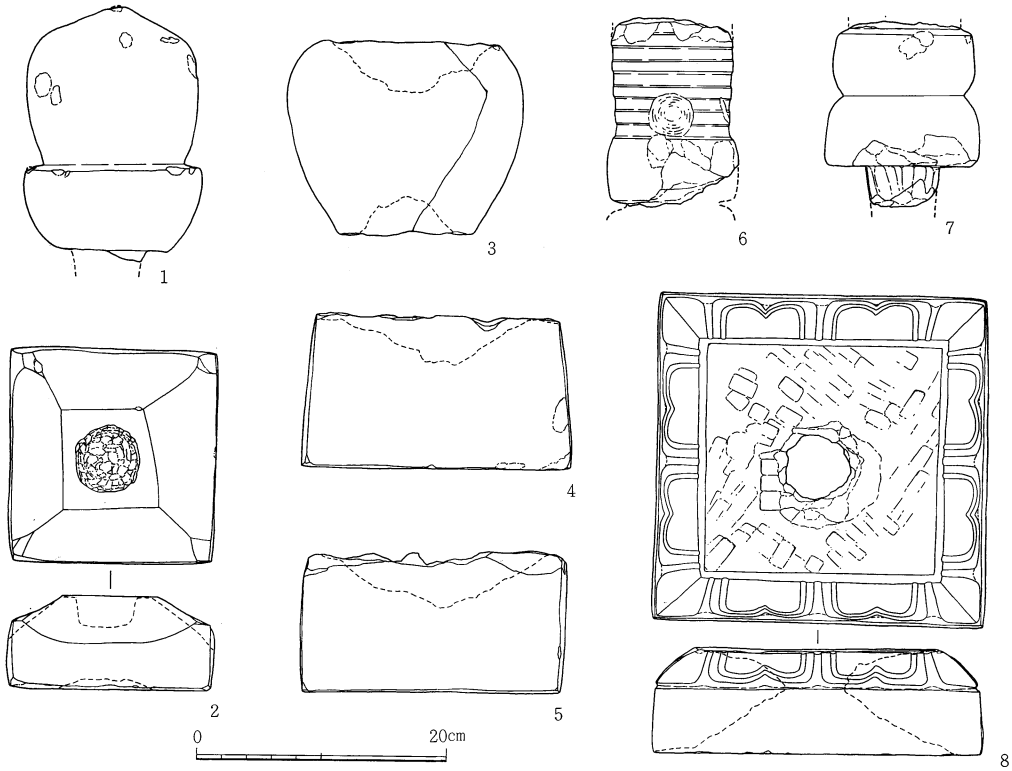
5は鉄釘。長さ5.6cm，頭部をやや折り曲げ，身の断面は不整な方形を呈す。一部に木質をとどめている。SX02出土。

## 3．石製品（第11図）

1～5は五輪塔の一部である。1は空風輪で，頂部がわずかに宝珠形を呈し，下端には火輪にさし込む枘が一部残存する。現存高20.4cm，空輪胴部最大径13.6cm，風輪胴部最大径14.2cmをはかる。SK02出土。2は火輪。軒の反りはあまり顕著ではなく，四隅の先端に面取りを施す。上面に枘穴が削り込まれ，下面水輪との接合部も浅く削られて凹んでい




**第10図**　土製品・鉄製品実測図




**第11図** 石製品実測図

る。高さ7.5cm，下面幅17×16.4cm，上面幅7.9×7.3cm。SX02出土。3は水輪で，上下両面とも中心に向けて削り込んで凹みをつくっている。高さ15.5cm，上面径14cm，下面径10.5cm，胴部最大径18.8cmをはかる。SX02出土。4・5は地輪で，いずれも上面中心に向けて削り込み，凹ませている。4は，高さ12.3cm，上面幅17.1×19.4cm，下面幅20.1×21.3cm，5は高さ11.4cm，上面幅19.6×20.2cm，下面幅18.9×20.0cm。両者ともSX03出土。

6～8は，宝篋印塔の一部である。6は九輪から請花にかけての部分とみられ，九輪最大径9.7cm，請花最大径10.4cm。B-01区3層上面出土。7は請花から伏鉢の部分とみられ下端に枘が削り出されている。請花最大径11.3cm，伏鉢最大径12.2cmをはかる。X-02区3層上面出土。8は反花座で，各辺に蓮弁2葉ずつ，四隅に間弁を配す。上面・下面ともノミ加工痕が顕著にみられ，中心に向け両面から刳り込み貫通孔を穿つ。高さ8.3cm，上面幅19.5×19.5cm，下面幅26.2×26.3cm。五輪塔の基礎の可能性もある。SX02出土。

これらの石塔類は，いずれも室町時代後半頃の所産と推定される。

## Ⅵ まとめ

今回の調査は，境内の西端部にあたる空間地を対象としたもので，本堂などの主要な建物からは離れた場所に位置しているが，上下2つの遺構面を確認することができた。上層の遺構に

は，土坑・溝状遺構・小ピットがあり，近世ないしそれ以降のものである。下層の遺構には，石室墓・集石遺構・土坑・溝状遺構・小ピットなどがあり，石室墓が室町時代後半以前，その他の遺構は大半が室町時代後半に属するものとみられる。

これらの遺構の中でとりわけ注目されるものに石室墓がある。石室の構造は，一見古墳時代の竪穴式石室に類似したもので，その時代的位置づけが問題とされよう。ST02が室町時代後半の遺構に切られていることから，それ以前のものと考えられるが，石室内からこれに伴う遺物が検出されず，上限の時期についてははっきりしない。ST01の掘り方埋土上半から土師器の皿ないし杯とみられる底部片が出土しているが，時期決定の資料としては十分なものではない。しかし，勝栄寺の創建は14世紀後半と推定されることからすれば，境内における墓地の形成はこれ以降とみなすことが自然であろう。そうすれば，石室墓の築造は室町時代前半～中頃に比定されるのが妥当と考えられる。中世墓の実態は多様であり，この遺構もそうした一例として位置づけることができるであろう。

ところで，今回遺構に直接関係するものではないが，第3層から弥生土器，各遺構埋土中には須恵器・土師器・陶磁器など，勝栄寺創建時よりも古い時代の遺物小片が若干出土している。これらの遺物は，河口三角洲の形成期，さらには付近一帯に創建以前における遺跡の存在した可能性を示唆するものとして注目されよう。

今回検出された遺構の分布状況をみると，近世ないしそれ以降のものは非常に稀薄であるが，室町期には墓地として利用されていたことをうかがうことができる。調査地一帯は，創建以降断続はあったとしても室町時代後半まで墓地としてその一画を占め，それ以降はほとんど利用されることなく空間地であったものと推定されよう。境内の全体的な位置関係からみて，この一画が主要な部分を占めた可能性は薄く，創建以来の主要な建物群は，現在の本堂とほぼ重複する場所にあったと想定して大過ないであろう。

いずれにしても今回の調査を通じて，これまで全く不明であった境内内部の状況の一端を明らかにすることができた。ことに特異な構造をもつ石室墓は，県内はじめての出土例として注目され，多様性に富んだ中世墓の実態解明に一つの貴重な資料を提供することとなった。なお，土塁については今回地形測量を行なったが，勝栄寺の歴史的変遷をより一層究明するには，今後この発掘調査に期待される所が大きいといえよう。しかしそれにも増してまず必要とされることは，県内で数少ない中世豪族屋敷の様相をとどめた貴重な遺跡として，これを将来にわたって十分に保存していくことであろう。

〔参考文献〕

○三坂圭治・小野忠熙『出城山勝栄寺の土塁等に関する調査報告書』（昭和47年）。

○山口県教育会『山口県百科辞典』（昭和57年）。

新南陽市埋蔵文化財調査報告　第１集

# 勝　栄　寺

昭和59年３月31日

編集　山口県埋蔵文化財センター
山口市春日町３－22

発行　新南陽市教育委員会
新南陽市大字富田3948番地

印刷　赤坂印刷株式会社